

画架・モチーフ・作者の位置関係

松本昭彦

美術教育講座

Relationship to Position between Easel, Objects, and Artist

Akihiko MATSUMOTO

Department of Fine Arts, Aichi University of Education, Kariya, Aichi 448-8542 Japan

1. はじめに

絵を描く行為には、大雑把に言って、何か物を見ながら描く場合と、見ないで描く場合の二通りがある。人物であれ、静物や風景であれ、見ながら絵を描くときには、そうしたモチーフ（対象）をイーゼル（画架）のどちら側かに配置する。山本文彦氏は著書の中で「イーゼルとモチーフ、座る位置の関係は、視線をあまり動かさずに画面とモチーフを眺められるように」¹⁾と言っている。当然、それは可能な限りそうすべきことなのだが、制作空間や画面の大小によっては、視線をかなり動かさざるを得ない場合も生じる。

一般に右利きの人は対象となるものや写真などの制作資料などを左側に置くことが多い。山本氏もモチーフを左側に置いて制作していることが同著に収められた写真からうかがうことができる。それは自分の利き腕が対象物を観察するのに邪魔にならないようにするためであろうかとも考えられるが、果たしてこの理由だけのためにいつもモチーフは左側にセットすべきなのであろうか。現実、筆者は制作時には、細部などの観察用に参考資料としてセットする際、左側の目の前に持ってくるのだが、基本的にモチーフはいつも右側にセットしている。意識的にモチーフを左側にセットして描いてみたこともあるが、何となく描きづらく、結局右側に戻す羽目になった。制作関連の書籍を見ると、筆者と同様に、モチーフを右側に配置する作家もときおり見受けられるのである²⁾³⁾。

そこで本研究では、制作者は画架の左側にモチーフを置いた方が良いのか、右側に配置すべきか、観察と再現に関する実験を通して調査し、見ながら描く制作者にとっての画架とモチーフの位置関係について考察することを目的とした。

2. 方法

本研究の実験では、モチーフとして10種類の図を用意した（図1~10）。それぞれの図（モチーフ）を、被験者群から見て、概ね、左・左斜め前・正面・右斜め前・右の位置になるような5カ所で見せ、20名の被験者に10秒の間で観察と再現をさせる実験を行った。モチーフを見せる場所は左・左斜め前・正面・右斜め前・右の順である。

モチーフとしての図は、形や大きさ・数・位置・方向などに気をつけて観察しなければならないものであり、実験後に回収した回答を分析調査し、これらの観点や反復による学習効果、個人の資質などの面から総合的に考察を行うこととした。

3. 結果と考察

方法に従い実験調査をしたところ、表1のような結果になった。以下、モチーフ毎の観点と位置・学習効果・個人の資質の面から分析することにする。

3.1 モチーフ別観点と見る位置との関係

(1) 図1は、4重の正方形であるが、上下左右の隙間のスペースが中央で広がっている。これを見抜くには、大きさ（広さ）に対する観察力を要する。また3重とか5重とかにならないよう、数に対する注意力も必要である。

1回目（左側から）では、20人中17名が隙間の大きさについて観察ミスをおかしている。内2人は数についても3重の正方形を描いている。2回目（左斜め前から）では、同様に20人中17名が隙間の大きさについて観察ミスをおかしているが、1回目に間違えなかった者3名のうち1名が2回目で間違いをおかしている。3回目（正面から）では、11名が間違っており、4回目（右斜め前から）のときには、16名による誤認があった。

5回目(右側から)では14名の誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で15%、左斜め前でも15%、正面で45%、右斜め前で20%、右で30%であった。右・右斜め前・中央・左斜め前・左の5位置×20名=100の回答中、正答数の合計は25で、正答率は25%であった(表2)。

(2) 図2は、5重の円であり、数に対しての観察注意力が必要である。

1回目(左側から)では、20人中1名が観察ミスを行っている。2回目(左斜め前から)では、1名も誤りはなかった。3回目(正面から)では、1名が間違っており、4回目(右斜め前から)のときにも、誤認者は1名であり、5回目(右側から)のときでは0名であった。

位置毎の正答率は、左で95%、左斜め前では100%、正面で95%、右斜め前でも95%、右で100%であった。100の回答中、正答数の合計は97で、正答率は97%であった(表2)。

(3) 図3は、7つの正方形であるが、上下方向や左右の方向における相互の位置関係や数に対する注意力が必要なモチーフである。

1回目(左側から)では、20人中16名が位置について観察ミスを行っている。内1名は数についても誤っており、6つの正方形を描いている。2回目(左斜め前から)では、20人中8名が位置について観察ミスを行っているが、1回目に間違えなかった者でも2名が2回目で間違いを犯している。3回目(正面から)、4回目(右斜め前から)、5回目(右側から)では、それぞれ7名の誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で20%、左斜め前で60%、正面で65%、右斜め前で65%、右で65%であった。右・右斜め前・中央・左斜め前・左の5位置×20名=100の回答中、正答数の合計は55で、正答率は55%であった(表2)。

(4) 図4は、8本の縦線であるが、数に対する注意力が必要なモチーフである。

1回目(左側から)では、20人中3名が数について観察ミスを行っている。内1人は余分に、2名は不足して線を描いている。2回目(左斜め前から)では、20人中わずかに1名が数について観察ミスを行っているが、1回目に余分に描いた者がまた同じく余分に描いて間違えている。3回目(正面から)、4回目(右斜め前から)では誤りはなく、5回目(右側から)では、1名の不足誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で85%、左斜め前で95%、正面で100%、右斜め前でも100%、右で95%であった。100の回答中、正答数の合計は95で、正答率は95%であった(表2)。

(5) 図5は、9本の放射線であるが、数に対する注意力と線の方向性の観察力が必要なモチーフである。

1回目(左側から)では、20人中9名が数や方向性について観察ミスを行っている。内5人は不足して8本の線を描いている。2回目(左斜め前から)では、20人中11名が数と方向について観察ミスを行っている。3回目(正面から)では、20人中7名が方向または数について観察ミスを行っている。4回目(右斜め前から)では10名、5回目(右側から)では5名による方向ないしは数についての誤りがあった。

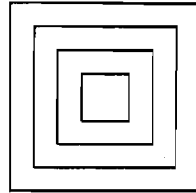


図1 4重の正方形

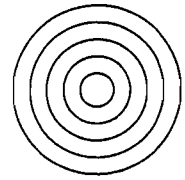


図2 5重の円

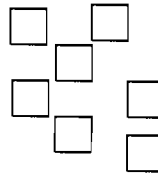


図3 7つの正方形

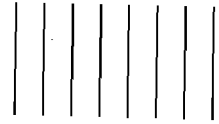


図4 8本の縦線

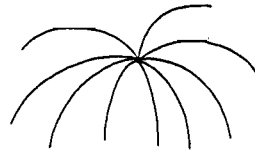


図5 9本の放射線

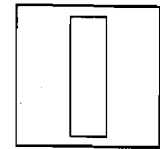


図6 正方形内に長方形

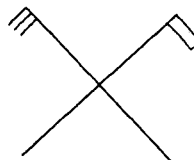


図7 鋤と鍬



図8 右巻き

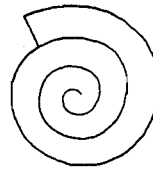


図9 左巻き

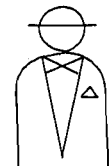


図10 人物

位置毎の正答率は、左で55%、左斜め前で45%、正面で65%、右斜め前では50%、右で75%であった。100の回答中、正答数の合計は58で、正答率は58%であった(表2)。

(6) 図6は、正方形の内部にわりと細長い長方形のある複合図形であるが、とりわけ内部の長方形の形(縦と横の比)に対する観察力が必要なモチーフである。

表1 実験調査結果の一覧 (観察位置・モチーフ・被験者毎の誤認)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	
A	①	S	S	S	S	S,Nf	S	S,Nf	S	S	S	S	S	S			S	S	S	S	
	②													Nf							
	③	L	L	L	L,Nf	L	L	L		L	L	L		L	L	L			L	L	
	④		Nf	Ne	Nf																
	⑤	D	Nf,D		Nf				D		Nf	D	D	Nf,D	Nf,D						
	⑥														S						
	⑦		S	S					S				S		S	S		S	S	S	S
	⑧																	S			
	⑨		S	S	S	S	S	S		S	S	S		S	S	S		S		S	S
	⑩	S	S	S	S	S	L	S	S		S	S			S	S	S			S	
B	①		S	S	S	S	S	S	S		S	S	S	S	S		S	S	S	S	
	⑥																				
	③	L	L	L				L	L			L						L		L	
	⑧	S				S															
	⑤	D	Nf,D	Nf,D	Nf				D	D	D	D			D			D	Nf		
	⑦		S	S		S	S							S				S	S		
	②																				
	⑨		S	S	S	S					S				S	S				S	S
	④			Ne																	
	⑩	S	L	S	S	S					S				S	S				S	
C	⑨	S	S	S	S	S					S			S						S	
	②			Nf																	
	④																				
	⑥			S																	
	③	L	L		L			L	L			L						L			
	①		S	S	S	S	S		S	S		S	S			S	S				
	⑦		S				S	S						S	S			S			
	⑩	S	L	S	S		L		L		S				S	S				S	
	⑧				S	S															
	⑤		D	D	Nf,D	D			D						D			D			
D	⑤	D		Nf,D		D		D				D		Nf	D		D	D	D		
	④																				
	⑧																				
	③			L,Nf	L			L				L		L			L		L		
	②	Nf																			
	⑨													S							
	⑩		L	S				L						S	L						
	①	S	S	S		S	S	S	S	S		S	S	S	S	S		S		S	S
	⑦												S	S	S	S		S		S	
	⑥		S				S								S						
E	⑥													S							
	⑦		S															S			
	①	S	S		S	S	S	S	S		S	S			S	S	S		S		
	⑩		L	S										S							
	⑨					S								S		S					
	②																				
	③	L					L					L	L	L	L		L				
	⑧				Nf																
	④			Nf																	
	⑤	D	Nf,D	S,D											Ne		D				

※モチーフ位置：(被験者から見て) A=左, B=左斜め前, C=正面, D=右斜め前, E=右

※誤認内容：S=形・大きさ(広さ) L=位置, D=方向 Nf=数の不足 Ne=数の余分

※a~t=被験者20名 ※○付き数字は被験者に見せた図(モチーフ)を示している

1回目（左側から）では、20人中わずかに1名が形について観察ミスを行っている。2回目（左斜め前から）では0、3回目（正面から）では1名の誤りがあり、4回目（右斜め前から）では3名、5回目（右側から）では1名の形の誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で95%、左斜め前で100%、正面で95%、右斜め前では85%、右で95%であった。100の回答中、正答数の合計は94で、正答率は94%であった（表2）。

(7) 図7は、クワとスキの交差した図形であるが、細部の形に対する洞察力が必要なモチーフである。

1回目（左側から）では、20人中10名が形について観察ミスを行っている。2回目（左斜め前から）では7名、3回目（正面から）では6名の誤りがあり、4回目（右斜め前から）においても6名の誤りがあり、5回目（右側から）ではわずかに2名の細部の形に誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で50%、左斜め前で65%、正面で70%、右斜め前でも70%、右で90%であった。100の回答中、正答数の合計は69で、正答率は69%であった（表2）。

(8) 図8は、中心から時計回り（右巻き）の渦巻き図形であるが、巻きの数や外側の入り口（出口）の形状・位置に対する注意力が必要なモチーフである。

1回目（左側から）では、20人中わずかに1名がミスを行っている。2回目（左斜め前から）と3回目（正面から）では、20人中それぞれ2名ずつの者が、外側の形の位置について観察ミスを行っている。4回目（右斜め前から）では全員が正答し、5回目（右側から）では、わずかに1名の誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で95%、左斜め前で90%、正面で90%、右斜め前で100%、右で95%であった。100の回答中、正答数の合計は94で、正答率は94%であった（表2）。

(9) 図9は中心から、反時計回り（左巻き）の渦巻き図形であるが、巻きの数や外側の入り口（出口）の形状・位置に対する注意力が必要なモチーフである。

1回目（左側から）では、20人中15名の被験者が外側の形の位置について観察ミスを行っている。2回目（左斜め前から）では、20人中9名が同様の観察ミスを行っている。3回目（正面から）では8名、4回目（右斜め前から）では減少してわずかに1名、5回目（右側から）では3名の誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で25%、左斜め前で55%、正面で60%、右斜め前で95%、右で85%であった。右・右斜め前・中央・左斜め前・左の5位置×20名=100の回答中、正答数の合計は64で、正答率は64%であった（表2）。

(10) 図10は、帽子をかぶり、胸に三角形のハンカチ、襟付きのシャツを着た人物像であるが、ハンカチ・襟・

帽子などの細部の形に対する注意力が必要なモチーフである。

1回目（左側から）では、20人中14名が細部の形について観察ミスを行っている。2回目（左斜め前から）では、20人中9名が位置について観察ミスを行っている。3回目（正面から）では10名、4回目（右斜め前から）で5名、5回目（右側から）では、最もミスが少なく3名の誤りがあった。

位置毎の正答率は、左で30%、左斜め前で55%、正面で50%、右斜め前で75%、右で85%であった。100の回答中、正答数の合計は59で、正答率は59%であった（表2）。

表2のようにまとめてみると、いずれのモチーフの場合においても、被験者から見て右側にモチーフがあるときは、平均正答率以上の成果が得られていることがわかる。

左側にあるときに平均正答率を越えたのは、10モチーフ中、図6と8の2つのときだけであった。左斜め前にあるときは、図2、3、6の3ケース、正面では、図1、3、4、5、6、7の6ケース、右斜め前にあるときで、図3、4、7、8、9、10の6ケースであり、右側にあるときだけが抜きん出て良い結果が得られたのである。

このことから、モチーフはなるべく制作者の右側に置いた方が、大きさや数・位置・方向性・細部などの観察と再現に適しているものと考えられる。

表2 モチーフ毎の位置別正答率 (%)

	A	B	C	D	E	※2
①	15	15	45	20	30	25
②	95	100	95	95	100	97
③	20	60	65	65	65	55
④	85	95	100	100	95	95
⑤	55	45	65	50	75	58
⑥	95	100	95	85	95	94
⑦	50	65	70	70	90	69
⑧	95	90	90	100	95	94
⑨	25	55	60	95	85	64
⑩	30	55	50	75	85	59
※1	56.5	68	73.5	75.5	81.5	

※A=左、B=左斜め前、C=正面、D=右斜め前、E=右

※1=位置毎の正答率、※2=モチーフ毎の正答率

3.2 見る位置と学習効果の関係

表2の下欄にあるように、位置毎の平均正答率は、1回目（被験者の左側にあるとき）において56.5%、2回目（左斜め前にあるとき）では68.0%、3回目（正面にあるとき）のとき73.5%、4回目（右斜め前にあるとき）で75.5%、5回目（右側にあるとき）では81.5%という結果になった。

このことから、回数を重ねるほど観察と再現の能力は向上できるものと考えられる。しかしながら実際に

は、図1のときでは4回目で正答率が下がり、図2においては3回目と4回目の二度も正答率が下がっている。図3では回数を重ねることで向上と横這い現象が見受けられるものの、図4のときになると最後の5回目で正答率は下がっている。また図5のときで2回目と4回目に正答率が下がり、図6のとき3回目と4回目のところで落ちこんでいる。図7では向上・横這い・向上となり、このケースにおいては学習効果が認められるものの、図8では2回目と5回目で平均正答率を下げている。図9では5回目、図10では3回目で正答率が下がっている。

1回目の正答率を基準にすると、以後5回目までの4回分の向上の機会があるにも関わらず、実際に向上（ないしは横這い）したケースは、総機会数40に対して28であり、70%程度の学習効果はあったものとして判断されるべきであろう。しかし本研究においては、被験者の右側から実験を開始させた場合の逆のデータを採取していないので断定することは避けなければならない。

もう少し具体的な例として、3回目の最後の図（モチーフ）は4回目の最初の図と同じものであるにも関わらず、誤答したものは3名増えている。4回目の最後の図も5回目の最初の図と同じものであるのだが、このときには誤答が減少している。いずれにしても部分的な判断をする限りでは70%、全体的に見れば100%観察と再現の能力は向上させることができるものと考えておく必要はあろう。

3. 3 個人の資質と学習効果の関係

表1のデータによれば、被験者によって間違ふことの多い者と少ない者、確実に成果を上げる者やそうでない者などいろいろな気質（資質）の違いがあることがわかる。そこで個人毎に、A（1回目で左側にモチーフがあるとき）、B（2回目で左斜め前にあるとき）、C（3回目で正面にあるとき）、D（4回目で右斜め前にあるとき）、E（5回目で右にあるとき）の誤答数を表3にまとめてみた。

対立するAとE、BとDを比較対照すると、Aの位置よりEの位置の方が1名を除いて間違ふの数は少ない。このことは3. 1において、被験者の左側にモチーフを置くよりも右側に置いた方が良好な観察と再現ができると述べたし、3. 2において繰り返しによる学習効果が認められると述べたとおりである。しかし、BとDの位置関係においては、BとDで誤答の数が同じであった者が5名、寧ろDの方が後にも関わらず、誤答が増えている者が4名存在していた。こうした事実はこれまでの考察と矛盾するものであり、これについて個人の資質以外の要因は考えられない。

表3右端欄に判定したように、こうした資質は概ね3通りに分類される。タイプIは、回数を重ねるにつ

れて（あるいは右側にモチーフを置くほど）成果を上げる者であり、タイプIIは、回数を重ねるにつれて（あるいは右側にモチーフを置くほど）成果を上げる者ではあるが、中だるみの傾向があって集中力が途中で一端消える者である。またタイプIIIは、回数を重ねるにつれて（あるいは右側にモチーフを置くほど）成果を上げる傾向はある者ではあるが、終盤で集中力がなくなる者であると言える。

こうした3種類の資質（気質）分類に分けると、本研究においては、タイプIに属する者が全体の8/20、即ち4割存在し、タイプIIに属する者が全体の9/20、概ね4割強であって、残りの約2割弱の者はタイプIII、即ち集中力が終盤まで長続きしない者が存在していたことになる。

表3 個人毎の各位置での誤答数

	A	B	C	D	E	判定
a	4	4	3	3	3	I
b	7	6	6	3	4	III
c	6	7	6	4	3	II
d	6	4	6	1	2	II
e	4	4	4	2	2	I
f	4	3	3	2	2	I
g	4	2	1	2	1	II
h	4	3	5	3	1	II
i	3	2	1	1	1	I
j	4	2	1	0	0	I
k	5	4	3	1	1	I
l	3	1	1	4	2	II
m	4	2	1	2	1	II
n	8	4	4	7	5	III
o	4	3	1	4	2	II
p	2	0	1	0	3	III
q	4	4	4	4	3	I
r	2	3	0	1	0	II
s	5	3	1	4	1	II
t	4	3	1	1	0	I

※A=左、B=左斜め前、C=正面、D=右斜め前、E=右

※I=回数を重ねると向上するタイプ、II=中だるみ傾向のあるタイプ、III=終盤で集中力がなくなるタイプ

4. ま と め

絵画制作者が画架の左右どちら側にモチーフを配置する方が制作に効果的かを判断するために実験調査を行った結果、次の3つの答えを得ることができた。

第1に、左側よりも斜め左側に置いたときの方がより観察と再現において良好な成果が得られる。それ以上に正面に設置した方が望ましい。ただ現実の制作ではキャンバスでモチーフが見えないので正面に設置するというのは非現実的なアイディアに過ぎないであろう。正面以上に斜め右に置いたとき、さらに右側に置いたときは最も観察と再現において誤りが少ない。

第2に、形や大きさ、相互の位置関係、細部など、制作において観察という行為は、極めて重要な基本で

あるが、反復繰り返し再現を行うことで次第に成果は上がってくる。この学習効果はたいへん大切なことであり、しばしば美術表現では才能の有無が口にされるのだが、継続的な不断の努力の重要性を忘れてはならないという当然の結論に至るのである。そのため図画工作や美術の教育現場にあっても、決して才能論だけでかたづけすることなく、教育者による(繰り返しトレーニングすればより良くなるという)「励まし」があれば、成果があるということを確認を持って伝えることができるのである。

第3に、個人的な資質というものが存在し、概ね4割強の人は繰り返して描くと半ば頃に一端集中力が切れて誤ってしまう傾向がある。2割弱程度の人は繰り返して描くと終盤で集中力が切れて誤ってしまう傾向がある。4割くらいの方は描けば描くほどより正確に描けるようになる。

絵画(視覚芸術)は、視覚を通して体験するものである⁴⁾。眼の構造から論じれば、右目で見ても左目で見ても、網膜が鼻側と耳側に二分されており、鼻側で受

けた刺激は反対側の脳へ、耳側で受けた刺激は同じ側の脳へ伝達される⁵⁾ので、利き目や右脳・左脳を論じてあまり意味はない。

いずれにしても絵画制作では、見て描いても絵であり、見ずに描いてもまた絵である。いいものを書くことに対する努力と工夫が大事であることに変わりはない。本研究が制作者や美術教育者の一助になれば幸いである。

註

- 1) 山本文彦：油絵，日本放送出版協会，1998，P.16
- 2) 美術手帖10月号増刊 絵を描くための道具と材料，1978，pp.58-60：アトリエの写真や図から坂本一道氏は右側にモチーフをセットしている様子が明らかである。
- 3) 美術手帖7月号増刊 デッサン，1981，pp.41：故池田満寿夫氏が右側を見ながらデッサンしている。
- 4) 布施英利：脳の中の美術館，筑摩書房，1988，P.22
- 5) 前原勝矢：右利き・左利きの科学，ブルーバックス B-782，1989，P.142

(平成12年9月5日受理)